



[令和 6 年 7 月 10 日 定例会発表要旨]

陸 上 の 話

——小樽の三馬を走る

特別顧問 立花 顕次 様

昭和11年、今の仁木町でリンゴ果樹園と稲作農家の次男として生まれました。小学校・中学校までは、片道 2Km を毎日歩いて通いました。(起伏の道の徒行が足・腰を鍛えたのかも)

陸上競技(長距離・マラソン)を始めたのは、中学校 2 年生の時からです。「文化祭と体育祭」交互に実施されていた。体育祭で中学校から 1Km 先の往復 2Km 程度のマラソン大会で、かなりの差をつけて、1 位になったことは自分でも驚いていた。この大会で優勝したことがその後の人生において長距離陸上競技を始める要因となった。



講演中の立花顕次氏

中学校を卒業し、実家はリンゴ栽培の農家の手伝いをしながら小樽の高校に通い、陸上部に入り、陸上競技大会に参加して上位の成績を残せた。

実家は年から年中忙しい農家であったが、両親からは「お前は次男なので自分で何をしたいか見定めて就職先を選定しなさい」と言われた。三馬ゴムという会社で駅伝ランナーを募集している計画を知り、応募して採用される。駅伝ランナー・長距離の陸上競技者として三馬ゴムに就職して、35 歳位まで競技生活に明け暮れていた。

その後、恵庭の森永乳業に転職して、陸上部のコーチ的業務をしていた。1964年の東京オリンピック時に聖火ランナーの引継ぎが会社の前であり、各ランナーの指導したことが思い出である。現在は車社会が優先され、駅伝競技はなかなか計画されるが実施しづらい時代になっていると感じる。

立花 顕次氏の競技成績 [北海道陸上競技選手権大会]

[2023 年の北海道陸上競技大会での 5000M の記録は14分 44 秒 85

・ 10000M が28分17秒 37 だとのこと]

年代 (年齢)	種目	記録	順位	在籍
1952年(16)	10,000M	36分 02秒 0	3位	小樽千秋高校
1955 年(19)	10,000M	33 分42秒 0	2 位	三馬ゴム
1957年(21)	10,000M	32 分59秒 2	1位	三馬ゴム
1957年(21)	5,000M	15 分 31 秒 6	2 位	三馬ゴム
1958 年(22)	10,000M	34 分 13 秒 0	2 位	三馬ゴム
1959 年(23)	5,000M	15 分 31 秒 8	1位	三馬ゴム

美瑛に育った歴史家 野村 武雄先生」 野村顧問を悼む

歴史研究家・特別顧問 茂内 義雄 様

美瑛に出生【青雲の志】

- 昭和 3 年 上川管内美瑛町生まれ
- 教育大学旭川校、法政大学経済学部卒
- 上川管内、美瑛町で中、高校教師、
北海道教育委員会、道庁、私大学に勤める
- 主な著書

単著書「歴史のなかの北海道・美瑛」「埋もれたパイオニア小林直三郎・柳本通義」
共著書「美瑛町史1～6巻」「北海道教育史4～5巻」「札幌文庫 68 札幌のまつり」
論考「子供盆おどり唄 50 年のあゆみ」「数奇な運命の聖書とクラーク博士」ほか

- 主な所属

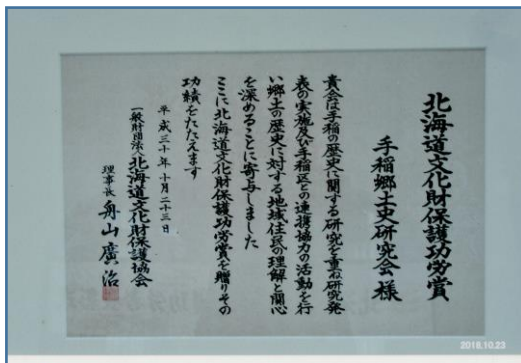
道立教育研究所北海道教育史編集副委員長、北海道自分史友の会副会長、北海道史研究協議会、北海道社会教育懇話会、美瑛町郷土史研究会、手稲郷土史研究会、



2 手稲史と野村武雄先生 【手稲の文化】

- 平成 17 年「手稲郷土史研究会」立ち上げ

手稲郷土史研究会の必要性は手稲郷土資料館設置を提唱する手稲区連協のプログラムの第一番に挙げられ、その推進力として早期にその立ち上げが求められ、発足は平成17年、46名が参加し区連協の 3 役(会長、副会長、幹事長)応募者のなから野村武雄氏、茂内義雄、一ノ宮博昭氏による予備会議が行われ、区連協より会長には歴史に造詣が深い野村氏に就任を要請したが本人は体調不安を理由に固辞された。



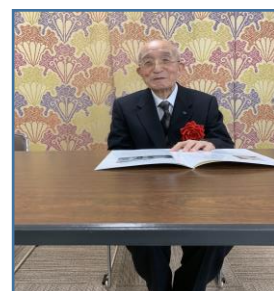
(発足 10 周年記念誌。堀り伝えるより)



北海道文化財保護功労賞一研究会として



北海道文化財保護
功労賞 個人として受賞
令和2年11月6日



●「子供盆おどり唄」原曲発見『50 年のあゆみ』

道、教育委員選定の盆踊り歌として使われている「子供盆おどり唄」の歌詞が原曲と違っていたことが道立教育研究所の「北海道教育史」編集委員会の野村武雄副委員長の調査で分かり東京のレコード会社がオリジナル曲を復元した（子供盆踊り唄 50 年のあゆみより）



7 月 10 日講演者二人（茂内様・立花様）

野村武雄氏から茂内義雄様への最後の手紙

病中加齢のため、一層不揃い、お許しください。

この度の「飛行場物語＝北日本飛行学校物語」出版おめでとうございます。

大変な郷土史の労作です。加えてご一族含む自分史、更に小生の小文が表彰式の写真に家内も加えて下さり恐縮の至りです。

どうか課題となっている科学大学並びに「ていねの自然と歴史」博物館大構想の基本資料となること、研究会も協力しボランティア説明員として、常駐できる日をゆめんでいます。

諸兄達の先立つ追悼の文、写真、記事等の近く小生を加えていただく、天命近しとぞんじます。

取り急ぎ、乱筆乱文にておゆるしください。

7 月 13 日 野村夫婦拝

茂内先生

一ノ宮博昭さんを悼む

相談役 鈴木清士

あんなに元気だった一ノ宮さんが、急逝されたとの報を受け、耳を疑いましたが、訃報は変りようもなく、今はただご冥福を祈るばかりです。

一ノ宮さんとは当研究会創設以来の付き合いですが、今年の1月、小樽祝津の龍泉寺に展示されている祝津在住の墨彩画家鈴木京子さんの画集「祝津物語り」を、濱埜さんと一緒に観に行ってきた。

祝津との往復の車中で、いろいろなこととお聞きしましたが、その一つに

「一ノ宮さんは工業高校出身なのに、工業関係の会社に就職しないで、何故新聞記者としての職に就いたのですか？」と尋ねると

「私は子どもの頃から速記に興味を持ち、高校を出るまで速記の塾に通っていた。就職の際この先生の推薦で道新と読売の採用試験を受け合格したが、全国紙の読売新聞社を選んだ」とのことでした。

読売新聞に入社後は、北海道支社で経験を重ねて第一線の記者として活躍され、岩見沢支局

長を最後に定年退職して手稲に戻っています。

手稲に帰った一ノ宮さんは、手稲のミニコミ紙「ていね倶楽部」を発刊して、まちの隅々の情報を住民に提供してきました。下手稲入植5代目の嫡流である一ノ宮さんは、手稲の昔のことについては誰よりも詳しく、当研究会でも指導的な役割を果たされていました。

私が特に注目したいのは、平成6年9月の第1号から12年9月の73号までの「ていね倶楽部」発行の中で「手稲山に眠る義経埋蔵金発掘」の記事が21回にわたって掲載されていることです。何回も発掘者に会い、発掘現場にも足を運んで取材した記事は、埋蔵場所を記した古地図や発掘現場の写真などもあって、臨場感溢れるものとなって評判を呼んでいました。

誰もが義経埋蔵金は「一夜の夢物語」だと思いながらも、ついつい引き込まれてしまう壮大な歴史ロマンがあり、その後の様子を知りたいという期待があったからこそ、記事が長く続いたものと思います。

一ノ宮さんは、「ていね倶楽部」廃刊後も、町内会や老人クラブなどからこの記事を基にした講演を頼まれ、語り口の巧みさと相俟って引っ張りだこの時がありました。

余談になりますが、この発掘を行っていた金沢一哉は私の学友ですが、こんな発掘をしていたことは知りませんでした。彼は床屋の息子で昔から家業の床屋に飽き足らず「他に大きな仕事をしたい」と日頃から云っていました。古文書などから手稲山に義経の埋蔵金があると信じ、家業を投げ打ち、家財を費やして発掘に取り組んだものと思われます。彼は後年妻子から離縁され、手稲山口の団地で一人で亡くなったと聞いています。

一ノ宮さんのことについては、詳しい方が大勢おられると思いますが、私は一ノ宮さんの人生のほんの一コマだけを取り上げて、故人偲んでの惜別の文といたします。

安らかに眠りください。



小田顧問より提供

一ノ宮博昭氏と研究会との思い出



2023 年二風谷アイヌ記念館



2022 年バスツアー青山の森



北海道造林合資会社創業満三十年記念碑の前
2019 年 4 月 1 日

手稲郷土史研究会の皆さまへ

手稲郷土史研究会会員 一ノ宮 護

手稲郷土史研究会の皆さまには、生前、父・博昭が大変お世話になりました。手稲をこよなく愛した父ですので、同じく手稲を愛する郷土史研究会の方々に惜しまれつつ亡くなりましたことは、このうえない喜びだったと思います。皆さま本当にありがとうございました。

さて、写真は父が33歳の時、家族で行った手稲山登山での一枚です。父は若い頃、新聞記者として忙しくしておりましたので、あまり家にいた記憶はありません。ですが、少ない休みの日には、こうして登山や冬にはスキーにも連れていってもらいました。

当時の千尺スキー場からリフトとゴンドラを乗り継ぎ頂上まで登り、一気に千尺まで滑り降りる。その一回きりで終わりというのが山スキー時代からの父の流儀でした。父のスキーは我流でしたが腕前は確かで、あとをついて行くのに必死だった事を覚えています。

我が家には、父が「一ノ宮家の歴史」をまとめて書いた『先達を偲んで』という文章が残されています。原稿用紙350枚にものぼる大作です。昭和44年12月から書き始め、札幌五輪が開かれる前年の昭和46年夏にかけて仕事の傍ら書いていました。ちょうど写真の頃です。

「一ノ宮家の歴史」については、先祖がいつ、どこから、どのような理由でこの手稲の地に辿り着き、生活を始めたのか？実はよくわかっていません。父も古い戸籍や寺の過去帳を調べたり、多くの地域の長老から話を聞きましたが、残念なことに、わが家のルーツに辿り着くことができませんでした。

しかしながら、手稲の歴史が始まったとされる明治5年に稲穂地区に移住してきた人の話から、その時には一ノ宮の先祖は既に稲穂のほぼ現住地に住んでいたという事がわかっています。つまり、父が書いた「一ノ宮家の歴史」は実は「稲穂の歴史」と言っても言い過ぎではないのです。『先達を偲んで』は、当初、我が家の歴史のみを書くはずでしたが、結局、長老から聞いた地域の昔話についても多くのページを割くこととなりました。

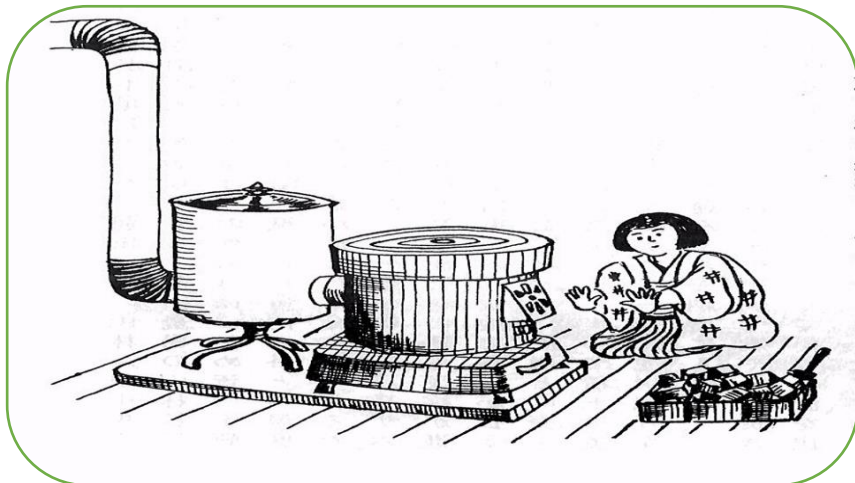
父はこの時に聞いた様々な話。また、後年、自主発行した「ていね倶楽部」の取材で見聞きした事。これらを元に地元・手稲への知識と愛着を深めていったのだと思います。

父の部屋には地域貢献で頂いた数枚の表彰状とともに、手稲郷土史研究会から頂いた「手稲ものしり博士証」という賞状が飾られています。父はこの賞状がたいへん自慢でしたし、私も父の人生に最もふさわしいのではないかと感じています。

郷土史研究会としては 一ノ宮博昭氏の手稲に関する資料はかけがえのない手稲史の一面なので、大切に保管して、小冊子にまとめると共に護さんが発表することを切望します。



昭和時代のイラスト



薪ストーブかな!石炭ストーブかな!泥炭ストーブかな 後ろに貯湯タンクを設置



馬 2 頭引きの牧草刈り機

前月の会報195号の訂正事項

- 1・標記の題名「ヲタルイ川」と記しましたが「ヲタルナイ川」が正解ですので訂正します。
- 2・1 ページ上より 9 行目の山田秀一と記しましたが秀三が正解ですので訂正します。

次回定例会 9月11日 18時15分 区民センター3階視聴覚室

発表内容 ノンフィクション作家 森山 裕吾 「前田農場について」

- *** 手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第196号 令和6年8月14日発行
- ** 発行責任者:沖田紘昭(手稲郷土史研究会 会長) 編集:立花邦雄・川上義昭
- ** 事務局♣006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一方 手稲郷土史研究会
- *TEL 090-3381-4994 *FAX 011-682-9674
- ** ♣メールアドレス teinenorekishij@gmail.com 担当 菊池 博行